

宮沢賢治文学における地学的想像力（九）

基礎編…安山集塊岩

——花巻農学校での土性調査実習にからめて——

鈴木健司

本稿では、賢治テキストにしばしば見出される「安山集塊岩」に着目する。安山集塊岩は、その土性的特質により、花巻農学校の土性調査実習と深く関わってくる。安山集塊岩とは何か、それを知ることとは賢治作品を読み解く上で価値のあることと考える。「宮沢賢治文学における地学的想像力（九）」としたのは、これまでに連作論文として（一）～（八）を発表しているからである。参考として題・掲載誌等を論文末に、記載した。これら連作は、全体の構成としては未だ整わないものだが、実証的（調査・検証）なものは「基礎篇」とし、テキスト解釈に踏み込んでいるものは「発展篇」としている。

一、「土質調査」

佐藤隆房著『宮沢賢治』（富士房、昭17・9、引用は昭46・4）は、賢治に近い立場にあった花巻病院院長佐藤

隆房によって集められた賢治のエピソード集である。賢治研究の初期にあつては、賢治の人となりを知る上で欠かすことのできない資料であつた。「序」に「逸話の材料を御示し下さいました各位」と記されていることから分かるように、エピソードは佐藤の体験というよりは聞き書きであり、曖昧な点や勘違いのようなことも含まれている可能性は少なくないと考えられる。それゆえ、安易な引用は避けなければならぬこともあるが、次に引用する「五八土質調査」は、資料として他に内容的に完全に重なるものがなく、残された資料としてはこの一点と判断される。花巻農学校の生徒と実施した実習に「和賀郡土性調査」というものがあるが、それとも異なっている。実習の内容を知るために以下に全文を引用する。

秋晴の一日農学校の生徒は賢治さんに伴われて、矢沢村に土質調査の実習に行きました。猿ヶ石川に架っている安野橋まで行き、そこで調査用紙が生徒に渡されました。その調査用紙には矢沢村の地図が印刷されており、それに調査した土質を色別を以て記入するわけで、生徒は組に分けられ、各方面に分遣され、午後の二時には、この安野橋に再び集合する手はずです。

午後二時生徒はそれぞれ記入を終って、安野橋に帰って来ました。先生の賢治さんの鮑屑帽子かんがつも見えました。生徒の中には、先生の色別と大分違った色別をして、困ったり、笑ったりしているものもあります。

「その橋の下に面白い形の岩が沢山あるでしょう。黝くろずんで、さびていて、庭石にでもすればすてきです。これはね、あっちの胡四王山こしおうざんから来て、ここにまた頭を出してるのです。このあたりでは高松石と呼んでいる、第三紀の岩です。」

帰りに道の傍の野に入り、賢治さんと生徒とはともどもに、野荊のばらや、まゆみの木や、あかしやの木を掘って帰り、校庭や校門のあたりに植えつけました。(大正十三年秋)

宮城一男は、このエピソードに注目し、専門的立場から

次のような考察を加えている。

ここには、いまでも昔もかわらぬ「地学実習風景」がくりひろげられています。この日の実習地、矢沢村というのは、いまの花巻市の郊外で、北上川にそそぐ、猿ヶ石川さるがしがながれています。その河岸にも、新第三紀の地層がみられるのです。川にかかっている安野橋は、いつも、せいとたちの集合場所であつたようです。

また、賢治がせいとたちに説明している橋の下の岩というのは、いまでは、よほど川の水がすくなくときでないともえませんが、玄武岩げんぶがんの露頭です。賢治もいつているように、これとおなじような岩石が、すぐ近く



猿ヶ石川に架かる 安野橋



安野橋付近の安山岩 (高松石)

の胡四王山をつくっています。

『農民の地学者 宮沢賢治』（築地書館、昭50・1）

私が本稿で考察しようとしている安山集塊岩は、宮城が「新第三紀の地層」と記したもののだが、賢治がその例として示そうとした「その橋の下に面白い形の岩が沢山あるでしょう。―略―。これはね、あっちの胡四王山から来て、ここにまた頭を出してるのです。このあたりでは高松石と呼んでいる、第三紀の岩です」に関し、残念ながら宮城の解説をそのまま参考にすることはできない。確かにこの付近の「猿ヶ石川」に現れている地層は「第三紀」のうちでも「新第三紀」に違いないが、岩石の種類認識に誤謬がある。宮城は「玄武岩」と説明しているが、安山岩でなくてはならない。それも、安山集塊岩と呼ばれるものである。賢治は、胡四王山が安山集塊岩でできた山であることを知っており、その知識を前提として、矢沢地区の猿ヶ石川に露出する岩石と胡四王山を成す岩石との共通性を、生徒に説いているのである。高松石の高松は旧矢沢村に含まれる地区名に由来している。

二、「和賀郡土性図」

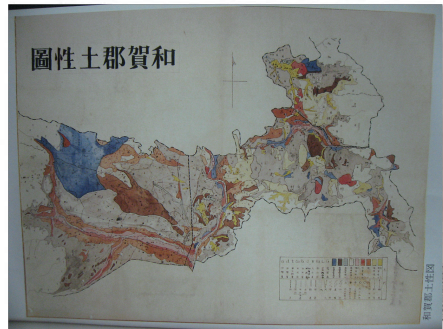
賢治が花巻農学校の生徒に課した実習に「和賀郡土性図」の作成がある。井上克弘著『石つこ賢さんと盛岡高等農林―偉大な風景画家 宮沢賢治―』（地方公論社、平4・5）に紹介されている。

岩石標本の筆跡鑑定のため宮沢清六氏を訪ねた際、賢治の教え子の一人が地図を持っていることが明らかになった。地図の持ち主は、東和町安俵の細川直見氏（大正十四年花巻農学校卒業）で、地図はこれまで未発表資料である「和賀郡土性図」であった。―略―細川氏の話によれば、この土性図は、大正十三年、賢治が花巻農学校で、課外活動として生徒を指導して作成させたものである。―略―そこでまず、賢治と生徒が作成した「和賀郡土性図」について、その概要を述べてみたい。この土性図は、縦と横がそれぞれ五十六、七十三センチメートルであり、薄い青インクで活版印刷された和賀郡土性区分図（縮尺五万分の一）に書き込まれている。この土性区分図は、おそらく賢治が花巻農学校で教材用に作成したものであろう。調査地域は、西側は和賀郡和賀町の東部、和賀川支流の夏

油川流域の岩崎新田地
域から江釣子村、北上
市地域を含み、東側は
和賀郡東和町地域を含
むものである。この地
図の左上部分に右から
左に向かって「和賀郡
土性図」と丁寧な黒色
の字で書かれている。
この土性図は水彩で極
めて鮮やかに彩色され
ている。――略――

賢治が和賀郡の土性図を生徒に作成させていたという事
実は、大きな発見である。さらに、井上はこの土性図の元
となったと推定される岩手県農事試験場作成の「和賀郡土
性図」（大正11年）の存在することを提示し、「すでに作成
された土性図を生徒に模写させた可能性が強い」と判断を
している。

この地図は、おそらく賢治が、岩手県立農事試験場が
報告した「和賀郡土性図」の中から湯田、沢内村地区



を除く地域についての土性区分図を、教材用に印刷さ
せたものと思われる。細川氏所有の「和賀郡土性図」
を見ると各土性毎に細かく区分され、凡例の部分は薄
く印刷された文字の上に黒インクで文字を書き込んで
いるのが分かる。賢治は、土性調査にあたりこの土性
区分図を生徒に配っている。生徒はこの区分された枠
の中の土壌の性質を野外で調べて、岩手県立農事試験
場で作成した土性図を参考にしながら、土性区分図に
色を入れ、模写していったのである。細川氏は「ハン
マー、図板、地形図を持って、土性調査を行った。先
生と一緒に何枚もみんな描いたが、全部色を
ぬった一番良いのを先生からもらった」と証言された。

細川氏所有の「和賀郡土性図」に関するかぎり、井上の
右の考察は的を射たものと判断される。しかし、「和賀郡
土性図」を「或る農学生の日誌」と関連づけて考察してお
り、その点混乱がみられるようだ。

日誌の中に登場する「僕」は、調査にあたり「郡で
調べたのをちゃんと写し」た「予察図」を持っている。
ところで、この「予察図」を作るために参考にした「郡
で調べた」ものとは一体何であろう。すでに述べたよ

うに、大正十一年三月に、岩手県立農事試験場が「和賀郡土性調査報告（第一報）」を出している。この中に付録として五万分の一「和賀郡土性図」が付けられている。この「和賀郡土性図」が、生徒が「予察図」を作るために参考とした「郡で調べた」ものではないだろうか。しかし、報告書には詳細な分析結果があり、また報告書の付図は五万分の一土性図で、精密な土性図である。一方日誌には、「郡のも十万分の一だしほんの大体しか」となっている。この食い違いは、この「或る農学生の日誌」がいわゆる日誌ではなく、賢治が作品風に書き替えたためであろう。

井上は、「或る農学生の日誌」に記される「郡で調べたもの」ものは「和賀郡土性調査報告（第一報）」（岩手県立農事試験場、大11・3）による「和賀郡土性図」ではないかと推察している。しかし、この推察は作品の内容と明らかに矛盾する。矢沢地区は稗貫郡であり、その調査のために「和賀郡土性図」を利用することはあり得ないことだろう。利用したとすれば、賢治もその作成に関わった「岩手県稗貫郡主要部及び土性調査報告書」に添えられた「岩手県稗貫郡主要部及び土性調査略図」（岩手県稗貫郡役所、大11・11）である。それによれば、旧矢沢村の旧天王近辺

は、第三紀層（安山礫岩）と洪積層（埴質壤土）、沖積層（砂質壤土）の三種の地層が色分けされ記されている。この土性図で見えるかぎり、洪積層の面積は少なく、第三紀層（安山礫岩）との境は、三角点の標高から九十四前後ということになる。等高線がないので、それ以上詳しい情報を得ることはできない。縮尺は「七万五千分の一」で、日誌に記される「郡のも十万分の一だし」とは一致しない。

三、キーン旧天王

「或る農学生の日誌」における、土性調査実習に関する記述だけを問題にするなら、「僕」の調査した地域は稗貫郡内にとどまっている。

猿ヶ石川の南の平地は十時半ころまでにできた。それからは洪積層がキーン旧天王の安山集塊岩の丘つゞきにも被さなってゐるかがいちばんの疑問だったけれども私たちは集塊岩のいくつもの露頭を丘の頂部近くで見附けた。結局洪積紀は地形図の百四十米の線以下といふ大体的見当も附けてあとは先生が云ったやうに木の育ち工合や何かを参照して決めた。

農学生の調査したのは、矢沢地区の安山集塊岩と洪積層との関係である。「旧天王」^{キーデンノ}とはどこか、おそらく、北上川と猿ヶ石川に挟まれる花巻市高木地区（旧稗貫郡矢沢村高木）にある「旧天王」「九天王」（一般に地元の人々はキューデンノと呼ぶ）を指すと考えて間違いない。原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍、平成11・7）には「旧天王山」のことかと記されているが、「旧天王山」という山の名は存在していない。標高約一五〇メートルほどの丘があり、頂に高木岡神社がある。「丘の頂部」とはおそらくその付近を指していると思われる。高木岡神社に揭示されている由緒書きによれば、「昔からこの付近一帯は久田野と呼ばれた先住民族が住んでいたらしく古い文化遺跡が数多く発掘されている。神社のあるこの森は長者屋敷と呼んでいた」と記されており、「旧天王」はおそらく地域名と思われる。ただ、詩「何かをおれに云つてゐる」（『春と修羅』詩集補遺）には、

何かをおれに云つてゐる

（ちよつときみ）

あの山は何と云ふかね

あの山なんて指さしたつて

おれから見れば角度がちがふ

（あのいたゞきに松の茂ったあれですか）

（さうだ）

（あいつはキーデンノと云ひます）

うまくいったぞキーデンノ

何とことばの微妙さよ

キーデンノと答へれば

こつちは琿河か遼河の岸で

白菜^{バツライ}をつくる百姓だ

（キーデンノ？）

（地図には名前はありません）

社のある百五米かのそれでありす

（ははあこいつだ）

うしろに川があるんぢやね

（あります）

（なるほどははあ あすこへ落ちてくるんだな）

（いやありがたう）

とあり、賢治は「キーデンノ」を山（丘）の名と理解していたようだ。この詩は羅須地人協会時代のもので、賢治が独居した下根子桜の家（洪積層）の下にある北上川の川原（沖積層）で畑仕事をしている賢治に、通りかかった軍人が北上川の向こう側にある山の名前をたずね、賢治がそ

れに答える場面である。

「うまくいったぞキーデンノー／何とことばの微妙さよ」という表現から察するに、本来なら「キユデンノー」と答えるところを「キーデンノー」と答えたところに、言語感覚の妙があるのだろう。原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（前出）では「中国語風にシャレて言ったものか」と解説されているが、中国語風にいっても「キーデンノー」にはならないように思う。ただ、中国語風ということは確かに詩の中に現れていて、「琿河」や「遼河」は中国東北部にある実在の川の名であり、賢治がそれを北上川にダブらせていることは明らかである。白菜（ハクサイ）「白菜」と言い換えているところにも中国語風が当てはまる。賢治がどのように「ペツアイ」という呼び名を知ったのか、当時そのように呼ばれることがあったのか未詳だが、南京官話（江戸時代に入ってきた中国語）では、「白」は「ペイ」と発音されており、「白菜」は中国語風である。ただし、北京語では「ペツアイ」とはならない。なお、中国からもたらされ白菜が日本に定着するのにはかなりの苦労があったようで、育成に成功したのが明治末年ころ、大正時代が白菜の普及期にあたるようだ。現在の品種が揃うのは昭和になってからである。

また、「地図には名前はありません／社のある百五米か

のそれであります」という賢治の説明だが、確かに「花巻」の五万分の一の地図（前出）には、神社の記号は存在する



旧天王の丘（左中程）



高木岡神社（丘の頂）



洪積層（丘の中腹）



安山集塊岩（神社付近）

が山の名前はない。「百五米」は、百五十米の意味か、誤記であろう。

さて、農学生の実習のポイントは、新第三紀の安山集塊岩から出来ている「九天王」の「丘」のどの位置まで第四紀洪積層がかかっているかで、「僕」としては、丘の頂部近くで集塊岩の露頭をいくつも見つけたという観察結果をもとに、丘の「百四十米の線以下」が洪積層だと判断したのである。

佐藤隆房著『宮沢賢治』に記載された「土質調査」は、内容的に「或る農学生の日誌」の記述にほぼ一致しているといつてよい。このような「土質調査」をするためには、等高線の入った五万分の一の地図が必要で、賢治は、大日本帝国陸地測量部の五万分の一の地図「花巻」（大5・5）を教材として利用していたと推測される。この地図は等高線が二〇メートル間隔に引かれており、旧天王に該当する場所の丘の頂では一四〇メートルの等高線を確認できる。「或る農学生の日誌」の「僕」が、「洪積紀は地形図の百四十米の線以下」と判断したもとは、神社の標高が一四〇メートル以上、一六〇メートル未満の高さという五万分の一の地図に記された等高線の存在が前提となる。安山集塊岩の露頭は神社付近でのみ確認できたからである。賢治が五万分の一の地図をそのまま教材として利用したのか、それとも、「和賀郡土性」のよ

うに自作の使いやすい地図を用意、作成していたかは定かではない。

さらに、「岩手県稗貫郡主要部及び土性調査略図」と「或る農学生の日誌」での洪積層の位置の判断の違いについてであるが、現地を調査した結果、現在高木丘団地として造成されている地帯は洪積層であることが確認できた。高木丘団地は丘の上部まで迫っており、標高一二〇メートル付近まで造成されている。洪積層はさらに上部にも確認でき、安山集塊岩を覆っている。「農学生」が安山集塊岩の露頭を発見したという丘の頂であるが、高木岡神社付近は現在かなり整地されており、確実に露頭と呼べるものは確認できなかった。ただ、神社の礎石部分などに安山集塊岩が広範囲に使用されており、かつては、露頭を見出せたのかもしれないことが推測された。

洪積層はローム層であり、場所によっては礫を多く含んでいた。礫の石の種類を調べてみると、ホルンフェルスが幾つも確認できた。ホルンフェルスは、接触変成岩の一種



礫（ホルンフェルス）

で、泥岩や粘板岩などが変成したものであり、北上山地で産する岩石であることが分かっている。したがって、猿ヶ石川によって運ばれてきた礫であると判断される。

なお、「或る農学生の日誌」に「午后一時に約束の通り各班が猿ヶ石川の岸にあるきれいな安山集塊岩の露出のところに集った」とあり、その場所はおそらく、花巻八景の一つに数えられている「^{ひららき}平良木の立岩」（現在・花巻市高松平良木）付近のことと推測される。



^{ひららき}平良木の立岩



川底の安山集塊岩

井上によれば、賢治の教え子の長坂俊雄氏から聞いた話として、やはり、似たような土性調査が実施されていたということである。

賢治の教え子長坂俊雄氏（大正十三年、花巻農学校卒業）は、土性調査について「ただ五人のグループを作り参謀本部の地図を渡され、君は矢沢へ行け、君は湯本へ行けなどといわれ、黒土は腐植土、赤土は砂質土だ、などと地図に色わけして記入するように教えられた」と述べている。

矢沢と湯本とは農学校（現在の花巻文化会館）から見て、まったく異なる方角となる。矢沢は北上川を越えた東方向であり、湯本は花巻温泉の方角なので、どちらかといえば北方向になる。どちらも農学校から六、七kmは離れているだろう。長坂俊雄氏の体験した土性調査では、グループごとに農学校から直接目的地に向かい、農学校に帰るのもグループごとということになり、佐藤隆房著『宮沢賢治』に記載された「土質調査」や「或る農学生の日誌」の描かれた「土性調査」とは少し異なるようだ。ただ、聞き書きによる細部の異なりは、あまり拡大して問題視すべきことではないだろう。

四、「経埋ムベキ山」

旧天王と胡四王山との地質的共通性はすでに触れたが、

「経埋ムベキ山」として名を記された山の、その最初の三山を挙げると「旧天山」「胡四王」「観音山」である。「旧天山」という呼び名はおそらく存在しておらず、高木岡神社のある旧天王の丘を賢治が「旧天山」と記したのだらう。

観音山が「経埋ムベキ山」の一つに選ばれた理由として、観音山が、かつて七坊の建物からなる高松寺の観音堂であつたことが挙げられるだらう。高松寺は明治の廃仏毀釈により廃寺となり、観音堂は岩根神社として現在に至ることである。小倉豊文『雨ニモマケズ手帳』新考』（東京創元社、昭53・12）には、次のように記されている。

③「観音山」、花巻市高松（旧稗貫郡矢沢村高松）東部の二六〇メートルの丘陵。「胡四王」の東南二キロ余の尾根続きで、その間を国道が東西方向に通っており、西南方二キロ余に「旧天山」があつて三山鼎立のかたち。

地学的視点からこの三山を考えると、安山集塊岩から成る山としての共通点が指摘できる。



岩根神社（観音堂）



安山集塊岩

五、稲瀬火山岩層

ここで、「旧天山」「胡四王」「観音山」の三山や矢沢地区の諸所（「平良木^{ひららぎ}の立岩」など）に観察される安山集塊岩について、地学的な確認をしておきたい。安山集塊岩と

は、〈安山岩の火山礫凝灰岩〉だということである。〈火山から噴出した大小の安山岩の岩片が火山灰によって固められた岩石〉といえは分かりやすいだろうか。矢沢地区付近の丘陵は、江刺方面から南北に連なっていて、それを「稲瀬層」または「稲瀬火山岩層」と呼んでいる。「稲瀬層」に関する紹介は、「基礎編・珪化木（Ⅱ）」（『言語文化』第20号、文教大学言語文化研究所）ですでに済ませたことだが、本稿においても重要なことなので、繰り返しになるが紹介しておきたい。『江刺市誌』第一巻通史篇「江刺の自然」の「(3)新生界」「1 第三系（二〇〇万—六五〇〇万年前）」、執筆担当は中田剛氏である。

稲瀬国見山付近一帯を模式地とし、稲瀬火山岩層と命名されていたものである。この層は水沢以北に限られ、しかも北上川東岸一帯に広大な範囲に分布している。市内稲瀬を中心に、北は矢沢から市内田原に至る東西約一〇キロメートル、南北三〇キロメートルにわたって分布し、古期岩相の上に、市内の新第三系の基盤を形成している。この層は、安山岩・安山岩質集塊岩を主体としている。またしばしば凝灰岩・凝灰岩質礫岩などをはさみ、厚さは約一二〇メートルである。

花巻の矢沢は稲瀬火山岩層の北限であることが理解されるだろう。この地層は良質の木化蛋白石（オパール）を含むことがあり、賢治は江刺岩谷堂産の蛋白石を所有していたことが書簡によって確認できる。

「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書」「第一章 地形及地質」「第二節岩石及地質系統」「第二項火成岩」には賢治による「集塊岩」の説明が見られる。

火山ノ活動ハ之ヲ大別シテ二種トナス第一種ハ鎔岩ノ溢出ヲ伴フモノニシテ之ヲ噴火ト名ケ第二種ハ水蒸気ノ張力ニヨリテ土砂石塊等ヲ抛出スルモノニシテ之ヲ爆裂ト名ツク、噴火ハ通常種々ノ程度ニ爆裂ヲ伴フ、火山カ抛出シタル火山岩ノ碎屑ハ其大サニ従ヒ火山灰火山砂火山礫火山弾火山塊等ノ名称ヲ与フ、比較的細小ナル火山層ノ水中ニ沈積シ多少層状ヲナセルモノヲ凝灰岩ト謂ヒ大小ノ火山屑乱雑ニ集積シテ多少固結シタルモノヲ集塊岩ト謂フ、集塊岩ハ嘗テ附近ニ於テ火山ノ爆裂暴威ヲ演シタルヲ示シ温泉ハ過去ノ火山作用ノ後現象ニシテ地下浅所ニ火山熱ノ未タ消散セサルヲ証ス。

「集塊岩」は葛丸川の両岸で多く観察されるとも記して

いる。



葛丸川 三鞍山付近



葛丸川 (同)

四、輝石安山岩（中性火山岩）本岩ハ本邦火山岩中最モ重要ナル位地ヲ占ムルモノニシテ第三紀及其以後ノ併発ニ係ル、同岩ヨリ成レル岩手火山ノ如キハ富士山ト同シク洪積世ニ噴出セルモノ如シ、本岩ハ微細ナル斜長石、輝石、磁鉄鉱等ヨリ成レル暗鼠色ノ石基中ニ小ナル黑色ノ輝石及白色ノ斜長石ヲ散点シ細カキ斑状ヲナシ時ニ斑晶不明ニシテ均質ナル暗黑色ノ塊ヲ為ス、本郡ニ於テ安山岩ハ紫波郡ノ南晶山彙ヲナセル同岩塊ノ南縁ヲナセルモノニシテ、葛丸川ノ兩岸ニ於テ

岩頸岩脈若クハ岩塊ヲナシテ現ハレ屢安山集塊岩ヲ伴フ、安山集塊岩トハ安山岩ノ大ナル破片及小ナル碎屑ノ乱雜ニ集積シタルモノニシテ、本岩ト安山岩トハ境界不明ナル場合多キヲ以テ地質圖ニ於テハ兩者ヲ同一色ニ塗抹セリ、要スルニ第三紀ニ於テ安山岩ノ噴出頗ル猛烈ナリシハ安山集塊岩及安山礫岩ノ分布大ナルニヨリテ推察スルニ難カラス。

少し論脈から離れるが、「葛丸川ノ兩岸ニ於テ岩頸岩脈若クハ岩塊ヲナシテ現ハレ」という記述に、「岩頸」の四兄弟を登場させた童話「樗ノ木大学士の野宿」の舞台が葛丸川であったことが思い起こされる。

六、安山集塊岩の土性

宮城一男は「台川」という作品を「地質巡検の記録」（同、前出）と名づけたが、確かに、「地質巡検」という言い方がよく当てはまる作品である。

〔この山は流紋凝灰岩できています。石英粗面岩の凝灰岩、〕

〔志戸平のちかく豊沢川の南の方に杉のよくついた奇麗な山があるでせう。あすことこゝとはとても木の生え工合や較べにも何にもならないでせう。向ふは安山岩の集塊岩、こっちは流紋凝灰岩です。石灰や加里や植物養料がずうっと少いのです。ここにはとても杉なんか育たないのです。〕うしろでふんふんうなづいてゐるのは藤原清作だ。あいつは太田だからよくわかつてゐるのだ。

「〔内は、賢治が生徒たちに発した言葉である。なぜ、通常の「」（かぎ括弧）を使わず「」（亀甲括弧）なのか、このことは、作品が単なる「地質巡検」の記録という性格を超えた創作であることを感じさせるが、本稿では、本稿の目的に沿う範囲で、宮城同様「地質巡検」の立場から考察しておきたい。

賢治や生徒たちの居るところは、台川である。引用箇所の後を読むと、そこは「釜淵の滝」に至る手前であることが分かる。台川の流れている一帯は、「この山は流紋凝灰岩でできています。石英粗面岩の凝灰岩」と説明されている。そこは男助層と呼ばれる地帯で、流紋質の凝灰岩層である。それゆえ、「石灰や加里や植物養料がずうっと少く、したがって「ここにはとても杉なんか育たないのです」

ということになる。

続けて「うしろでふんふんうなづいてゐるのは藤原清作だ。あいつは太田だからよくわかつてゐるのだ」と賢治の独白が記されるが、なぜ藤原という生徒が「太田だからよくわかつてゐる」のか、読み手にはよく理解できないのではないか。そこには、太田地区が安山集塊岩の地域であるという知識が、賢治の独白の前提となっているのである。その太田から通っている藤原清作は、自分の住んでいるところでは杉などがよく育つことを見知っていたので、賢治の説明がよく理解できるという意味で「ふんふんうなづいてゐ」たのである。

太田地区は、戦後高村光太郎が山小屋に独居していた地区で、花巻の平野部と較べた場合、山際の雪深い土地の瘦せた土地柄ということになるだろう。ただ、賢治が作成に関わった「岩手県稗貫郡主要部及び土性調査略図」で確認すると、付近の山は「安山礫岩」とされており、大日本帝国陸地測量部の五万分の一の地図「花巻」（大5・5）を見ても「太田村」付近は「鍼葉樹」地帯とされている。「鍼葉樹」は〈杉〉や〈檜〉と考えてよい。実際、高村山荘の北側を流れる〈瀬の沢川〉を調査したところ、基本的にはその一帯は大石層と呼ばれる凝灰岩層なのだが、処々に安山岩の露頭が見られ、賢治が「安山礫岩」地帯と判断した

理由も分からなくはない。

次に挙げる詩「丘陵地」（『春と修羅』第二集）にも、「安山集塊岩」が、土性の問題として取り上げられている。下書稿（一）によれば、

丘陵地を過ぎる

一九二四、三、二四

きみのところはこの丘陵地のつづきだらう
やっぱりこんな安山集塊岩だらう

そすると松やこならの生え方などもこの式で
田などもやっぱり段になったりしてゐるんだなあ
いつころ行けばいいかなあ

ぼくの都合は、まあ、四月の十日ころまでだ
仕事の方が済んでから
木を植える場所や何かも決めるから

—略—

「五輪峠」と同じ日付を有する詩だが、「丘陵地」が具体的にどこを指しているかは未詳である。「きみ」は誰なのか、「教え子」と見ることもできるが、「きれいにこさえないと／お嫁さんにも済まないからな」という詩句があることを考慮すると、「教え子」では年齢が若すぎる気もする。と

もなく、賢治は「きみ」の家に行つて、庭かどこかに、いろいろ木を植える約束のあるらしいことが分かる。その時点での賢治にとっては土性が重要であり、「安山集塊岩」だということが分かっているから、どのような木でも植えられると考え、賢治の計画が楽しく膨らんでいくのである。

七、まとめ

賢治と安山集塊岩という岩石との本格的な出会いは、おそらく、盛岡高等農林学校時代（研究生）といえるだろう。稗貫郡の地質と土性の調査のため、郡内をくまなく踏査した時である。「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書」（前出）の記述に、賢治にとっての安山集塊岩という岩石の意味合いがよく現れている。そこでの安山集塊岩はあくまで地質学的なものであつて、活発な火山活動を示す岩層として認識されている。それが、賢治の作品テキストに記述される段階では、安山集塊岩に関する認識が異なりを見せていると指摘できると思う。それは、農業や林業というような生活に直結した（土性）というフィルターを通過した安山集塊岩であり、賢治の生き方の変化に対応していると考ええる。

（了）

- (一) 「基礎編・珪化木 (Ⅰ) 及び瑪瑙」〔文学部紀要〕
文教大学文学部第21・2号
- (二) 「基礎編・珪化木 (Ⅱ)」〔言語文化〕第20号、文教
大学言語文化研究所
- (三) 「基礎編・〈まごい淵〉と〈豊沢川の石〉」〔注文の
多い土佐料理店〕第12号、高知大学宮沢賢治研究会
- (四) 「応用編・檜ノ木大学士と蛋白石、発展編・ジャー
タカと地学」〔文学部紀要〕文教大学文学部第22・1
号
- (五) 「応用編・修羅意識と中生代白亜紀」〔文学部紀要〕
文教大学文学部第22・2号
- (六) 「応用編・第三紀泥岩と影―朔太郎の不安との類似
性―」〔文教大学国文〕第38号
- (七) 基礎編・「地質調査ルートマップ」の検証(その一)
―「五間ヶ森」とその周辺―〔文学部紀要〕文教大
学文学部第23・1号
- (八) 応用編・「岩頸」意識について―〈現実〉と〈心象〉―
〔文学部紀要〕文教大学文学部第23・2号

【PDF の訂正について】

誤植のため、一部 PDF を訂正した。

p.126 9 行目 **誤**「発表篇」→ **正**「発展篇」